

題目：十九世紀日本における書物の変容

【目次】

序論

第一章 『開版指針』にみる幕末の書物事情

- 第一節 『開版指針』書誌事項
- 第二節 『開版指針』各項目に関する検討
- 第三節 『開版指針』の構成からの考察

第二章 『開版指針』成立に関する考察

- 第一節 他資料と『開版指針』の比較
 - 第一項 『開版指針』と『嘉永撰要類集』『市中取締続類集』との相違
 - 第二項 『開版指針』と『昌平坂学問所日記』の照合
 - 第三項 宮武外骨『筆禍史』と『開版指針』
- 第二節 『開版指針』と筒井政憲
 - 第一項 筒井政憲とは
 - 第二項 『開版指針』と筒井政憲の関連
 - 第三項 「源頼光公館土蜘蛛作妖怪図」と筒井政憲
- 第三節 『開版指針』と蕃書調所
- 第四節 『開版指針』が目指した〈指針〉

第三章 紙質にみる書物の多様性と『開版指針』

- 第一節 料紙観察という方法
 - 第一項 紙の基本情報
 - 第二項 製紙の基本原理
- 第二節 明治期の書物にみる料紙
 - 第一項 『当世書生气質』の書誌情報と料紙観察結果の比較
 - 第二項 『和獨對譯字林』にみる明治期の洋紙
- 第三節 各種版本紙質調査結果からの考察
 - 第一項 蘭書の料紙観察
 - 第二項 画譜類の料紙観察
 - 第三項 須原屋系列書肆出版物の料紙観察

- 第四項 楸形蕙齋作品の料紙観察
- 第五項 森島中良著作の料紙観察結果
- 第六項 版本料紙観察結果からの考察
- 第四節 作品に描かれた紙—原料や製法から見た紙の違い
 - 第一項 『御存商売物』における紙—山東京伝の感覚
 - 第二項 明治期における紙—作家たちが捉えた和紙から洋紙への変化
 - 第三項 『黄金虫』における紙—アメリカにおける紙質の変化
 - 第四項 『書林清話』における紙—中国における紙質変化
- 第五節 漢籍複製の挫折—竹紙は何故生産できなかったのか
 - 第一項 竹紙原料モウソウチクの招来
 - 第二項 薩摩における竹紙と漢籍

結び—伏流の書誌学

本論文は十九世紀、江戸末期から明治期にかけての日本における書物の変容について、書誌学的に考察することを主意としている。

現在、我々が日常的に手にする書物は洋装本といわれる形態で、明治期以前の日本ではほとんど見かけることのない装訂であった。和装本から洋装本への変化は、和紙から洋紙へという紙質の変化を伴っている。政権の交代と時期が近かったために、一般的には明治期における西洋技術の流入に伴い、書籍の洋装本化と洋紙の製造が行なわれたようにとらえられがちである。本論文では、日本におけるドラスティックな装訂形態の変容について、書誌学の視点から多角的に考察する。

考察にあたっては、主として国立国会図書館所蔵の『開版指針』を対象とした。出版統制、筆禍、また出版許可を巡る江戸と地方とのやりとりなどに関する記事を集めた写本である『開版指針』は、これまで歴史学や文学の研究者間でごく部分的に研究対象とされてきた。第一級資料と評されている一方で、いつ・誰が・何の目的で写しまとめた資料であるのか、その全体像はこれまで十分な分析がなされていない。『開版指針』の内容は、天保の改革期以前から安政度までの内容を含んでおり、戯作以外の作品を扱っていることから、幕末の出版状況に新たな側面を発見する上で看過できない資料である。本論文では『開版指針』の全容を以下の方法で検討した。

1. 『開版指針』について、同一あるいは類似する内容を記載している同時期の公的資料と詳細に照合して内容を検討する
2. 他資料との内容照合から成立の背景を考察する
3. 江戸期から明治期にかけての資料の紙質を調査する新たな研究方法（料紙観察）を用いて、出版物自体から情報を得る

4. 『開版指針』の内容・成立背景・料紙観察のデータを併せて総合的に判断をする
本論文では、書物の主たる構成物質の紙について、新しい知見を提唱することを主意に添えた。

第一章では、『開版指針』の全体を考察した。第一節で書誌事項を示し、第二節で内容を全四〇項目に分けてそれぞれに検討を加え、第三節で全項目の構成から考察した。その結果、『開版指針』の特徴が天保の改革時に実施された出版統制にまつわる記述の多さとその内容であること、書物の出版・流通に関する問題点の中で特に天保の改革において実施された「改（あらため）」、すなわち出版前の草稿検閲とそれを掌った昌平坂学問所に関連する項目の多さが特質であることを示した。寛政・天保の改革期を中心とする近世の発禁・筆禍・検閲に関する先行研究は、出版統制の結果から検討されている。対して『開版指針』は、出版統制を実施した幕府側の見解がうかがえる点が特徴であることを明らかにした。江戸町奉行所が編纂した『市中取締類集』『市中取締続類集』、あるいは、法令先例集である享保・天保・嘉永期『撰要類集』における出版関連の記述とは、重複する部分もありながら、『開版指針』は資料としての在り方が異質である。この点については、奉行所と学問所という組織の違いに基づく差異ばかりではないと考えられ、その差異に『開版指針』の成立意義が示されていることを指摘した。

第二章では、『開版指針』の成立について考察した。第一節では『嘉永撰要類集』『市中取締続類集』（第一項）、『昌平坂学問所日記』（第二項）といった同一内容が記載されている同時代の公的文書、さらに時代の近い資料であり、『開版指針』を初めて世に知らしめた宮武外骨の『筆禍史』（第三項）とを比較した結果、昌平坂学問所の内部記録に基づいていることを明らかにした。第二節では、幕臣で学問所御用を務めた筒井政憲が成立に携わった可能性を指摘した。第三節では筒井政憲が設立にかかわった蕃書調所の洋書出版と『開版指針』の関連性を指摘した。第四節で『開版指針』は、その記述内容と筒井政憲との関連性から、幕府にとって内容・形式・流通を含めた、模範的な書物を世に送り出すための「指針」を検討するための資料であることを示した。

第三章では、これまでの書誌学研究上、検討される機会が少なかった紙質に注目し、料紙観察という新しい方法を用いて江戸期から明治期に刊行された書物を調査した結果から『開版指針』の成立と目的の裏付けを試みた。第一節では、料紙観察が書物に使用された料紙をマイクロスコープ（顕微鏡）で観察することにより、文字や画像という紙面に記された情報以外に、紙という素材そのものが持つ情報を読み取る方法であること、および料紙観察に必要な基本的知識を掲げた。第二節では、明治期の書物における料紙観察例として『当世書生氣質』（第一項）と『和獨對譯字林』（第二項）の料紙観察結果を示した。第三節では江戸期に刊行された蘭書（第一項）・画譜（第二項）や書肆（第三項）や著者別

(第四項および第五項)の料紙観察結果を示した。以上(第一項から第五項)の結果により、整版印刷から活字印刷へという技術的な変化に伴い、印刷適性を考慮した新たな出版方針が誕生しようとしていたという結果を導いた(第六項)。第四節では、江戸から明治の作品と海外の作品から、紙質のとらえ方に対する共通点を示した。第五節では、紙質の地域性を明らかにするため、日本と朝鮮半島における植生の違いから生じる原料の差異や気候の違いに伴う製紙技法の差異について示した。これらの結果をふまえて検証し考察を加え、第二章で示した『開版指針』と筒井政憲の関連性の裏付けとした。また、筒井政憲が考えていた政権による印刷方針が、出版と近似する紙幣という形態で明治政府に受け継がれていることを指摘した。

結びでは、『開版指針』という資料が伝えている文字情報と、書物素材の紙質というミクロ情報を併せて考察するという、既存の書誌学が主たる研究対象とする作品の本文研究とは異なる方法を用いた理由を述べた。文字や絵画という記録が二千年近くの永きにわたり、紙という媒体により時間と空間を超えて伝えられてきたことは紛れもない事実である一方、書誌学において紙に注目することは、現時点では傍流的な研究である。しかしながら、紙という物質自体に肉眼では可視化できない原材料の痕跡という「データ」が存在し、そのデータもまた情報の一つであること、そして、その情報は紙を使用していたすべての国家・社会において共有されていたことを本論文で示し、また、紙の不可視部分を可視化する方法として、料紙観察という方法の有効性と、紙という媒体が伝えている情報の歴史的価値と多様性、そして紙という物質が担ってきた役割について、電子媒体が普及している現在において再確認することの重要性を述べた。